でなく、もっと手近かにできる仕事が残されている筈だと言うと、素直に君がうなづいていたことなど思い出す。

それから二、三度、君からは便りがあったきりで、こちらから度々出す手紙にもあまり返事をくれなかった。或年の年賀状にはただ、兄よ！元気なれ！、程度しか君はかいてよこさなかった。

'69年三月、俺が娘や孫を連れて上京した節、君と連絡がつきにくく、四、五度目に君の声を聞いた。広海貫一君、平岡誠君、山口安二君らと銀座で一パイやむ話が決まり、俺は君を新宿へ迎えに行ったとき、君はノートに何かを一心に記入していた。そして、こんなものをかきかけているといって、自伝的なものを俺に読んできかしてくれた。これから本当のことをかくのだがと前述し乍らの、その一節を聞いたが、何故、俺はそのノートをそのとき取り上げておかなかったのかと、今後悔している。たしか、このノートを俺によこせと言ったが、いや、これから本当のことをかくのだ、出き上りしだい君の所へ送る」といいながら、とうとう、その実現をみなかった。そして今となっては、いくら捜してもそのノートの行方さえ判らなくなってしまった。その后、俺は上京するたびに君に電話した。が、遂にそのご一度も会えずじまいに終った。いまさら本当に残念におもう次第だ!!

この稿は、故沢田武雄追悼文集のためにかかれたものである。が文集が上梓されず、そのまま蔵されていたのを、ここに収録して故人をしのぶものとした。なお、若干語句用語と一部内容を異にした原稿が二種あったので編者の判断でひとつにまとめた。(向井彦)

想い出の人々（旧稿）

小松亀代吉

大阪の天王寺公会堂で日本労働組合総連合創立大会当時、私はまだ学校へ通っていた。そして公会堂の表で野次馬の一人で騒いでいた。私の親父は逸見直造ー逸見吉三君のお父さんーの大ファンだった。昔堅気の頑固一徹な人で、労働組合とか社会主義なんて解する様な人ではなかったが、悪に対する反撥感情には非常に強い人であった。そして米騒動当時、まだ生徒であった私が、親父の感化と言うか、又逸見吉三君が私と同じ学校の二級上であった関係からか、何時のまにか興味を持つように成った。

関東大震災で、平沢計七らが亀戸の警察で刺殺された。「ここを突け！」と自分の胸を叩いて叫んだということを聞いて偉く英雄視したり、朝鮮人が大虐殺されたと知り怒ったり、大杉栄の憲兵による銃殺と古井戸に投げこんだ卑怯な行為に憤激したのは、大阪東区の高麗橋で食堂を経営していた兄の下で働らいていたときだった。

翌大正十三年に誰れを頼る者とてなく上京した。誰れ一人知人のない私が辿る道は、新聞配達からニコヨン、土方部屋と転々とした。アナとかボルとかそんな判断もつきかねた。ただあの震災のドサクサに平沢や何んにも知らぬ朝鮮人の大虐殺、大杉夫婦やいたいけない子供宗一を締め殺した官憲に対する反逆心にのみ駆られた観があった。

転々として落ちついた先が赤坂溜池の右翼、内田良平の経営している黒竜会簡易宿泊所だった。一泊十八銭、幾十名の者が横に一列に並んで枕を揃えてねた。朝おきると手配師が仕事を持って待って居た。この宿

泊所には毛色の変った人々も多かった。大学の教授だったと言う男や、大会社の課長が酒のために転落して元の部下の所へ餅をもらいに行くのに一諸に行ったことも覚えている。本当にゴルキーの「どん底」を地でいったという感があった。最初に知り合ったのが「銀座事件」の秋山竜四郎で何時も一諸に仕事に行った。先年亡くなった宮崎秀人も同じ室であったが当時は余り話をしなかった。

秋山と内山という男と三人で加藤利造（故人）と共に自由労働組合相互会を組織して、大井の上の蛇窪に事務所？をもった。勿論金を儲けることを知らぬ輩のあつまりはたちまち食ふのに困った。加藤は年令的には可成り上だし世事に長けていたので、「進め社」の福田狂二らと近ずき、食糧は時々都合はつけてくれた。が、貢銭にも困って五反田辺に出かけてはパンフレットを喋りながら売りぐいしていた。秋山と鈴木厚の所へ米をもらいに行けるようになったのは大分後のことだと記憶している。加藤の二工きらぬ態度に嫌気がさして、六本木に六帖一間を間借りしたが、黒竜会当時に知り合った沢田武雄や村上義博らが度々泊りにくるので、やがて家主から追ひ出された。そして北千住警察署のすぐ横の露路に一軒建の手頃な家をみつけて、村上義博、沢田武雄、三上由三、生野進と五名で野蛮人社が生れたのであった。

経済界の混乱に伴う大恐慌、倒産や三・一五事件は獄中で知ったが、そして出獄した私に大きな打撃を与えたのは、水沼歌川の汎大平洋会議問題の事件であった。（汎大平洋と云えば、高田格が石川三四郎を偲ぶ会に出席していて色々と話し合ったがその後の消息を知らない。）

やがて御大典という行事が私達を福山においておかなかった。不穏な事故は警察署長の首がとぶ。無理矢理追いたてられ、尾行を付けられて、丁度訪ねてきた林隆人と尾行の四人の妙な旅がはじまった。（林君とは浜松楽器争議の節以来の縁である。静岡知事官舎放火事件で、植田増吉、関谷栄、林の三人が静岡刑務所

に収監され放火罪で起訴されていたが、故布施辰治弁護士の努力で、関谷、林は無罪となって出獄してきた。その出獄祝を静岡市七間町の岩井屋というそば屋の二階で島田市の富豪、加藤弘造の援助で、大勢あつまってやったことがある。その時の仲間で牧野秋平、西田治作、関谷栄、山口勝清、三上由三、望月辰太郎ともう五指にあまる人たちが亡くなっている。）

さて、広島から山陰を廻って尾行を困らしたり、仲間げんかをしながら奈良へついた。奈良丹波市（今の天理市）の野口市郎宅に草鞋をぬいだのだが（ここて当の野口をはじめ駒井喜作、二木寅、木場穂、木柴らが故人として数えられる）、結局、御大典のときは古巣の福山の留置所ですごすような結果と成った。

釈放されて福山を去り、東京木挽町の自連の事務所で数ケ月をすごした。階下には延島英一がおり、二階では伏下六郎や上田日出男、山口安二ら押し合い、へし合いしてねたものだ。大久保卯太郎や小川光生らも時々泊りにきた。

サトウハチローらがアナキストに対する悪口を雑誌にかいた。芝原淳三が彼らと一戦を交へるとイキマクり、田戸正春の家におちあい、悪いクジを引いたのが山口安二と私であり、加藤武雄方へピストルと短刀をもって挑戦に行ったのもこの頃であった。

それから静岡の沢田の兄さんの所へ食客となった。それと同じく、愚弟賢兄の例で、また私の兄貴の所へも皆んな厄介をかけたものだ。沢田の兄さんは良く皆んなの面倒を見てくれた。だが私の兄と同じく、今はいない。

静岡の馬淵に家を借りたが、その晩からねる布団すらない仕末だった。ゲロさんこと木下茂が、別府の田坂精春の所へ養生に行く途中、馬淵に立ち寄ってくれた。その木下も田坂の所で死んだ。田坂も近い日に死んだと聞く。大塚昇や鈴木重宝らが女房を世話してくれた。小林辰夫や近藤沢郎らが出入りして、こちらの面倒をみてくれた。そのうちに子供が生れたがすぐ死んだ。長谷川武・よね夫妻がこの家にしばらくいた。

女房とよねさんは仲がよかったが、それ以来とうとう二人共会う機会を失ったまま死んだ。瀬川竜が出入りするように成ると、まるで梁山泊同様で、近所の人々からだんだん指弾されるようになり、とうとう静岡を捨てた。丁度東京の黒色青年連盟がスパイなどの手により内部分裂がおこり、真面目な連中が殴ぐられると時を同じくしたと思われる。若杉浪夫のお母さんに迷惑をかけたのも同じ時期であったかも知れない。

大阪に帰ってきたのが昭和七年ごろと記憶している。箕面に泊ったり、涼を覚えたりしているうちに二人目の子供が生れた。子供の生れる少し前に芝原浮三が転がりこんできた。足場が良かったせいか、寄り易いのか、静岡、東京からと、二、三泊の食客はたえまなく続いた。二見敏雄が芝原とピストルを入手する話も、私の留守中この家でしたらしい。そのピストルで芝原は二見に撃たれて死んだ。松田等が、近くに住んでいた小松一郎を一升瓶で殴った。一郎は私に説明するうもりできたらしいが、正月酒に酔っている私は一郎がなぐりこんできたと感ちがいして、小松と小松が大喧嘩したのも昔の話である。先日、林と安田理恵子と三人で土佐へ行った節、小松一郎を探したが判らなかった。たしか室戸台風があったころ、今岡山にいる高畑信一が同居していた。

その後、社会主義弾圧のために暴力取締りの名目で検挙がはじまった。箕面の連中も根こそぎ逮捕された。軍は戦争拡大に狂奔して邪魔者は牢獄にぶちこんだ。そして漸次、軍部一色にぬりつぶされていった。

戦時中に死んだ者はとてもここにかきれない。高川の幸ちゃんが、中尾正義が、野洲白鯨が、と数え上げることができない。お互いに連絡のとりようさえなかった……

戦後日本アナキスト連盟が久保譲、副島辰己を失った。山鹿も病の床に伏し、水沼さんが、宮崎秀人が病み疲れて倒れた。今、若い世代がきた。過去を追うなんてナンセンスと云うなかれ、過去のつみ重ねが又、新しきを生む母体となるやも知れない。

追記――この原稿を起稿中に肋間神経痛をやみ、数日痛みに転々としていた内に、延島英一の死と近藤憲二の死をきいた。おもえば日野弥平を尾ノ道刑務所で無言のまま見送ったこと。生島望、横山楳太郎と新世界を呑み歩いた一晩。美声の主で陽気な笠原勉。一晩中酒を呑み乍ら論議した大津孝之助。肺臓膿のために死んだ荒川(丹)吉三郎。田舎の宿屋で誰れ一人見る者もなく倒れた後藤学三や名古屋の伊串英次。偶然にも松田等と同隊だったとハガキをくれた黒旗社の安西激など、指を屈しても数えきれない人達の思い出が、とめどもなくうかんでくる。

一九四八年・第一回西日本放議会の頃。

戦前から顔は知っていたが、そのころの小松君は各地を転々と活動していて、ときたま大阪にたち帰った時に顔をみるぐらいであった。

だから私との交流は戦后からである。昭和二十三年一九六九年九月二三日発行

〈新過去帳覚書〉掲載

この〈新過去帳覚書〉は――小松さんが中心になって、大正13年刊行で直ちに発禁になった稀本、中浜鉄遺稿集〈黒パン〉と〈祖国と自由〉大杉追悼号〉の刻出版をした。その刊記念をかね、中浜追悼、大阪の社会運動物故者を偲ぶ会がひらかれ、約五十人の仲間があつまった。その日、席上で配られたー追悼文集で、A5 70頁、15人が書いている。

であったか、大阪は、それまで運動の中心であった逸見君が日労会議に主力を転じたために、とつぜん連盟関西地協の活動や、平民新聞の配布などに空白が生じた。加えて、日本アナキスト連盟第三回大会を迎えるにあたって、関西側の態度を決める必要に迫られていた。ところが住所録が整備されていなかったので招集不可能とされた。

この困難のときに小松君は東奔西走、散在する不明の住所を調べ上げて、同年四月十八、十九日の両日、小松君宅にて、第一回の西日本協議会を催すことができた。

このときの集会を、向井孝君は、

「大阪での地区協議会に出席、多くの同志にあい、新しい各地の栈運にふれて、体の調子や、仕事がいそがしいなどと、僕の弱さをはいてはいられない、今回の大会もぜひ出席せねばならぬ、昨日の会合のフンイキにふれ、今度の大会において西日本協議会は大きな役割を果すだろうと大きな期待をかけています。」（無政府主義会議第三号）

向井孝をしてこのように感激させたこの集会に、小松君から「君の住所がわからなかったのが、ヤット聞き出した」と、案内状を受け、和歌山から出席した時から、私との深い交流が始ったといえる。

この最初の西日本協議会が、小松君の骨折で大阪でもたれて以後、集会は小松君宅で度々催された。平民新聞大阪支局をも担当し、若い人達の中心となって、大阪の運動発展に努力された。

小松君の死に際し、その当時の功績を追想して哀悼に胸をいためるのである。　河本乾次。

以下、各氏からよせられたものの掲載は、当着順、不同となっている。見苦るしい点、容赦をそう。

奈良。服部のころ

安田理貴子

小松亀代吉！古い名前だなァ。この名前を知ってから、五〇年近くなるのではないか。

大正の末から昭和初めにかけて、私は、大和の丹波市で、野口環と夫婦生活をしていた。天理教が財源で三日にあげず野口と、交替でサイセンを掠っていた。

或日とつぜん、小松ちゃんと林隆人君がきた。ふたりとも二〇代のピチピチした美青年だった。チョンガーでもあった。

丁度、自由連合協議会の大串孝と、水平社の駒井喜作が来合せていて、野口がひとりひとり紹介した。

小松ちゃんは、鞆の錨釘会社争議で尾道刑務所に投獄され、先日出てきた処だった。十数人の警官相手に大格斗し、荷車に縛りつけられて護送されたとか。

争議は散々の敗戦で、多くの同志を獄中に送り、自分もまた囚われた。

刀は折れて　矢はつきて
われ囚われの身となりぬ
陰惨苦闇　血盟の
同志は散りて影もなし

異郷の鉄窓の下に目を仰ぎ、革命歌の一節をうたいながら熱涙を交ったという。

当時、女闘士のホヤホヤだった私は、この哀切きわまる話に胸をえぐられた。横暴な資本家と飽しままな権力の弾圧に、いよいよ憎しみと激しい怒りを覚えたのだった。

早速、その日天理教に走ったことは云うまでもない。毎度のことで出し渋る天理教に、負けてはならぬ、たったいま、荷車の話に感動したばかりではないか。葬儀車を持ってこられても、金をとるまでは退ぞくものか。この気迫に圧されてか、いつもの五円が十円にな

つた。早速、酒・肉・米を両脇にかゝえ、私は意気揚々と帰つた。当時、酒は白鶴で一升一円八〇銭、米に至つては二五銭だつた。

待つていたみんなが、歓声をあげる。あの顔！懐しいなァ！みな若く元気だつたなァ。

その日、もう一つ忘れられないことがある。焦げ飯を釜からこそげて、そつと茶碗に盛つている私を、小松ちゃんは目ざとく見つけて

「リキさん、女だけがコゲ飯を食つたのは昔のことなんだよ。今は男も一しよに食うべき時代になつてきている。そのためにみなが運動してるんじやないか。ぼくの茶碗にも入れてくれ……」

茶碗に焦げが這入つていると、男は怒つて、飯茶碗を投げたという、大正の終りごろの話である。

……時代はすこし飛ぶ——

官憲のいよいよつのる迫害と闘いながら、阪急沿線の服部にいた頃。赤貧洗う悲惨な暮しの中から、小松夫婦と、私は八婦人戦線Ⅴを発行していた。（その頃、よく顔を覗かせていたのは、小野十三郎ではなかつたか）朝も昼も夜も筆屋通いした貧乏期であつた。そして、生地獄の戦争中も、彼との仲は続いた。

昨年の秋、彼は実姉と私を、南紀旅行に誘つてくれた。その時もう大分弱つているようだつた。彼はガンのことを、家族にも吾々にもかくしていた。こうした病気は、周囲が本人に知らさないのが通常なのに、彼は全く迷だつた。病を秘して元気そうに、勝浦の温めぐりや太地の鯨館に遊び、帰途、伊勢によつて私方に一泊したのが最後だつた。

人の出合いは大切にしたい。通り過ぎることは多くても、出合うことは、めつたにない。

友達は生きていてくれるだけで、充分ささえになるものだということを、小松ちゃんの死で痛切に思いしらされた。ああ、もう、小松ちゃんのような友にめぐりあうことはないだろう。

葬儀の日、私は仲よし一君のうしろで、遠い奈良時代を、昨日のことのように、想つていた。

静岡時代 ―ハツさんのこと―

大塚　昇

昭和四十五年三月、故沢田武雄（交通事故死した）の追悼会を静岡で開いたとき、小松亀代吉君は関西地方の同志を代表して出席した。いつものとうり彼はきわめて快活にふるまっていたが、私には小松亀代吉君の体力的な弱まりが感じられた。会場から静岡駅までのタクシーの中でそれを云うと、彼は「自分の体は自分が一番よくわかっているから心配しないでくれ！」と至極元気な姿で別れていった。

ところがその年の秋、「沢田武雄の『思い出』の原稿、十枚ばかり書きかけたままで病気になり入院することになった。」という手紙がきた。そして「早く全快するように」という返事を彼の自宅へ送ったままで今年の新年を迎えてしまった。年賀状を出したが彼から何の音信もない。その後一体どうしているだろうと心配になりながらも、筆不精の私は手紙を出さずにいた。

今年の二月、東京・水道橋の全逓会館で故山鹿泰治の追悼会があり、私も出席した。そのとき、会場に居合わせた佐野甚造君や龍武一郎君に、「今日、大阪の小松君は出席するだろうか」と尋ねたところ、佐野君は「小松君の身内の者が交通事故をおこし、そのことで僕に相談があると手紙がきているから、出席するだろう」という返事だった。しかし、彼はついに姿をみせなかった。

そしてこの夏、東京から送ってもらったリベルテールの記事の中に「小松亀代吉君死亡」の記事をみて、あまりのことに茫然とした。すぐ石川、後藤両君に、小松君の死亡を伝えると両君とも非常にびっくりした。

小松君がはじめて静岡へやってきたのは、大正十五年の早春ごろで、当時、静岡県では牧野秋二（修二）、大塚昇、石川熊雄、後藤章、山崎猛（佐一）らが中心となって、黒色青年連盟を組織して、運動を進めてい

た。そのころ、島田市の大地主であり同志として運動をしていた加藤弘造が資金を出して、静岡県から愛知県、岐阜県の三県下縦断という無政府主義大演説会を開いた。その演説会には岩佐作太郎をはじめ近藤憲二、水沼辰夫、綿引邦夫、武良二、松本親みん、横山梅都上田光敬、小坂千里（嘉一郎）、塩田英一、山口勝清小松亀代吉その他多数の同志が弁士としてやってきた。この演説会は一日も途中休みなしという強行軍であったように記憶している。

この大演説会が終ったあと、小松亀代吉、山口勝清両君が静岡へやってきて、清水市に居をかまえ港湾労働者や同市内の木材従業員の中へアナキズム運動を展開しはじめた。またボル打倒運動もかなり激しく行った。またこの間、静岡市の大衆評論社に結集していた大塚、牧野、石川、後藤、疋田その他と協力して、アメリカ帝国主義の魔手にかかり死刑の宣告を受けたイタリアのアナキストであるサッコとバンゼッチ両同志の死刑反対の演説会を、静岡、清水市内で開き、無政府主義の昂揚に努めた。

その後、山口勝清が病気にかかり郷里の福山市へ去ったのに続いて、小松、沢田両君も福山市で運動するため静岡を離れた。福山市での小松亀代吉、沢田武雄、山口勝清らは同市周辺の労農、市民にアナキズム宣伝を展開した。当時、福山市外であった鞆町の鞆製釘会社の労働者が賃金問題をからめた労働争議をおこした際に、小松、沢田、山口の三人は、率先して応援にかけつけ、勝利をめざして闘った。しかし争議は、警察、消防団などの狂暴的な弾圧によって惨敗。小松、沢田山口らは幾つもの罪名を負わされて尾道刑務所へたたきこまれてしまった。その後、彼らは相ついで出獄し、山口だけが福山市で運動をつづけることになり、小松と沢田は、沢田のふる里である静岡市へ移ってきた。

当時の小松亀代吉は独身の青年で、野蛮人社同人で銀座事件に関係した疋田治作や沢田武雄、大衆評論社の大塚昇、鈴木重宝らと共にアナキズム運動を進めた。そのころ、生活のためにフォードの中古トラックを買

い入れて砂利運般をやっていたが、小松君の妻女になったハツさんは他の少女とともに男臭の強い事務所へ出入りするうちに、小松君と相愛の仲になった。これを知った大塚昇、條伊太郎（戦後日共へ入党）、山崎猛らが二人を結婚させるために、ハツ女の両親に面会して小松との結婚をたのみこんだ。が、どうしても許してもらえず、最後の手段として二人を駆落結婚させることにした。こうして小松君とハツさんの恋愛は同志らの応援もあって実を結び、その後の二人は苦しい生活の中で愛情にみちた家庭をきづいていった。

その後大塚と疋田の両人が投獄され、雑誌は発禁処分にされてしまった。両人の入獄中は、小松、沢田、鈴木らが協力して、大衆評論の後継紙「静岡自治新聞」を発行するようになった。出獄後、大塚も彼らと行動をしばらく共にした…。

大阪での戦時中の小松夫婦の生活はまったく知らない。

第二次大戦後、昭和二十一年に第一回アナキスト大会が東京で開かれたとき、私は会場で小松亀代吉君の元気な妻と再会した。その後、ずっと彼ら夫婦と交友がつづいた。ハツさん同伴で静岡を訪れた小松君と私と三人で、駿府公園で記念写真を撮ったりしたこともあった。また、静岡に三上由三（野蛮人社の元同人）も住んでいたので、彼の仮らいていた旅場を訪問したりしていた。

しかし――いま、快活でアナキストそのものといえる小松亀代吉はもう二度と逢うことのできない別世界の人間になってしまった、死亡したのだ。

先立ったハツさんのあとを追って――。

小松亀代吉よ、ハツ夫人よ、われわれの運動をいつまでも見守っていてくれ。

（昇）

江東自由労働組合

江西一三

日本軍国主義が、アジア侵略の意図をようやくはっきりしだしたそのころ、僕らは、高橋光吉、小川益、鶴岡直知、小松一郎らと、東京本所区柳島の一角に、「関東一般労働組合」をつくっていた。各自が交互に自由労働で得た収入で、どうにか共同生活をつづけながら、自由連合労働運動をすすめるためであった。

当時、その近所に「江東自由労働者組合」（後に東京自由労働者組合に改称）があった。大沼渉、宇田川信、山本勘介（山本忠平――獄中で拷問死）らと共に小松亀代吉君も同組合事務所にがんばっていた。（同君はまた〈野蛮人社〉という思想グループのメンバーとして、黒色青年連盟の加盟員でもあった）

お互いに若く元気で、よく訪ね合って歓談したものだ。

それ以来――大阪に在住していると逸見君から聞いていたのに、ついに会う機会が一度もなく、訃を聞いた。

僕の記憶にのこる小松君は、精悍そのものの野生的な闘士だったと、その面影が今でもうかんでくる。

大和民労会と爆弾事件

河本乾次

喰いつめて料理屋の下足番になった話

日本の社会運動の共同戦線、または統一運動の形をとった大正九年十二月創立の〈社会主義同盟〉は、創

立に至る数ケ月間、準備協議会が度々もたれた。この準備会の通知状がたまたま私の就職先の「星製薬工場」に届いたため、人事係は早速に、社会運動に関係している理由で私を解雇した。

その頃の私は、社会運動には駆け出し時代で、準備協議会に出席しても、先輩たちの協議を傍聴しているだけだった。ときどき宣伝演説会のビラまきや、ポスター貼りを手伝うぐらいで、会社が危険がるほどの者ではなかった。後でわかったのだが、人事係は私の解雇を正当づけるため、私が工場内で発禁の出版物をひそかに配布していたとか、ストライキを宣伝していたとか、デッチあげた報告書を社長に提出していた。

工場での私の転場はモルヒネの精製部で、世間では入手至難な高価な麻薬品部であった。その気になればいつでも持ち出せる機会があった。それで人事係ではモルヒネ精製部の工員には他の転場より特に監視がきびしかった。高価なモルヒネを外部に持ち出されて、社会運動の資金にされてはとの懸念と、社会運動者をモルヒネ部に入転させた人事係の責任とを社長から叱責されるのを怖れて、私を解雇したのが本当の理由であった。

一方準備協議会では、「社会主義同盟」創立という画期的な歴史の大きな回転の中で、私のような無名青年の解雇問題などは微々たる個人的なできごとであった。岩佐走(作太郎)からは、「運動のかげには犠牲が伴っている」と同情と慰めの言葉をうけた。大杉栄は「たちまち生活に困るから社長から金をとれ」と現実的な助言をしてくれた。

私はもう人事係では話はつかないと思い、社長とかけあうべく京橋ビルにある本社へ度々足をはこんだ。そのたびに社長は台湾へ出張中とか、ドイツ大使館へ行ったとか、ときの内務大臣後藤新平の官邸だとか、なかなか会うことはできなかった。最後に秘書から金封の状袋をわたされた。当時(大正九年)の金額で百円札数枚は入っているのかと思ったら、たった十円札五枚であった。

私の生活は窮迫していてこれ以上社長をつかまえるための時を空費することは困難だった。やむなく長期戦をとることにして、玩捜しにいった。当時の玩業組合所に足を運んだが、徒労に終った。浅草のある桂庵（口入屋）にとびこんだ。そこの周旋で、浅草観音堂裏通りにある蝶々料理店の下足番になった。

入店してわかったが、この店の経営者は、当時の国粋会の中で新選組の役割をした悪名高い大和民労会の会長河合徳三郎であって、店の女主人は彼の妾であった。大和民労会は周知の反動団体で「社会主義撲滅」をスローガンに、演説会などで日本刀をふって殴りこみをかけ、殺傷事件までおこしている。

私は知らなかったとはいえ、とんでもないところへとびこんだものだと内心は驚いたものの、また大和民労会の内部情報がわかるかもしれない、とそれを楽しみに黙々と下足番の下働きに日を送った。

それから数日すぎた或る日、突然河合は玄関から、「下足番いるか！」と大声でどなりながら妾のいる帳場へ荒々しく入ってゆくのである。私は「もう俺のことがバレたのか」、少し早いとは思ったが、来るものが来たと覚悟はきまっていた。河合は一室に私をよびこんで、四人の子分に私をとりかこませた。そして河合と私との間を三メートルほどのへだたりをあけ、その間に机をおいて防壁がわりにした。私をすわらせて河合は棒立ちになったままである。私が何かの拍子に膝を少しでも前にくずすか、何げなくにじりよるとそのたびに彼はびっくりしたていである。あわてて後ずさりし、両手を前につきだしてさえぎるように、身を守るかっこうで「前にくるな、よるな！」、と血相を変えてどなる。私が彼にとびかかって危害でも加えるかと感違いしたらしい。彼の身を守る敏感さは、暴力を商売にしている博徒の通性なのか、それとも実際は噂に反してきもっ玉の小さい男だったのか。河合は力道山のような巨体の持主で、全身にホリモノをしていたが、そのザマは反動団体、悪名の大和民労会の会長河合とは思えなかった。

「キサマは誰にたのまれて、俺の寝首をかきにきた！大杉栄か、堺利彦か、おまえはどちらの子分か」

この愚問には返答に困ってしまったが、

「誰にもたのまれない。まただれの子分でもない。一度、下足番をやりたかっただけだ。」

ありのままの返答であったが、

「うそをつけ、かくしたってダメだぞ。たしかに俺の寝首をかきにきたのだ。」と言いながら、急に話しを意外なところへ転じてきた。「おまえたちはバクダンを所持しているそうだが、それはどこから手に入れるのだ!?」

なぜこの場に爆弾の話を持ち出したか、それは後でわかったのであるが、そのときは気がつかず、何とか彼の話に調子を合した返事をし、この場をごまかすことなくすごすよりしかたがないと思い、「バクダンは鉱山の人夫と連絡をとってあって、工事用のダイナマイトを廻してもらうことになっている。」と、根も葉もないことを言った。

河合はこのとき何か意をえたように、ニタッと気味わるい笑いをした。私に誘導尋問をして、うまく白状させたというふうに見られた。この話が終ると、私は気がつかなかったが、いつのまにか隣りの部屋に待機していた特高にすぐ引きわたされた。この場で河合やその子分たちが私に暴力をふるわなかったのは、隣室に特高がいたからであった。

警視庁での取調べは、意外にも河合のことではなく、予期していなかった衆議院門前に爆弾を仕かけた事件のことであった。寝耳に水とはこのことで、私がその有力な容疑者だったのである。それでやっと、河合が爆弾の話をもちだした理由がわかった。

この爆弾事件というのは、当時（大正九年）第四十二議会開会中の衆議院の門前に爆弾が仕かけられ、未発に終ったが、当時としては異常な事件であった。警視庁の面目をかけての捜査が始まり、懸賞金まで出されたが、犯人は不明でつかまらなかった。

この騒ぎの最中、私が屋裏深く解雇された後、準備

協議会やその他の集会に顔を見せず、忽然と姿をくらましたことになって、これが容疑の目星にされたのであった。そして捜索の結果、大和民労会の河合の妾の家で下足番になっていることをつきとめたのであった。このことから河合のドギモをぬき、また河合との爆弾問答が家議院門前の爆弾事件の容疑になったわけである。

その頃、私は毎日丹念に〈日記〉をつけていた。その押収された日記によって、当時の私の日々の行動や考え方がハッキリわかり、アリバイも完全であって、私のうらづけ捜査は迅速に行なわれ、終った。そして証拠不充分で約二十日間の留置所から釈放された。

ナンセンスな物語はあっけなく幕切れとなった。〈そして私は東京では就職口がなく、まもなく大阪にもどって、南海電鉄に入社することになる〉

その後時代は流れて、大和民労会は解散し、河合は映画会社河合プロダクションをつくり社長に納った。一度面会に行って当時のことをひやかしてやろうと思うつち、河合も、星社長も早く死去して、その機会を永遠に失なったのは残念である。今では淡い夢のように、遠い過去の思い出になって終った。

パン略配布　養子になりそこねた話

河本乾次

昭和五年頃、私の堺市在住時代の話である。両親も生きていたから食うに心配なく、すねかじりの責任のない放縦生活であった。おかげで悪い病気にかかり、数日医院通いをして快方に向ったとき、大阪の生島繁